

(2) トンネルの先の光ーはざまに生きる若者たちの声ー

池上 重弘

静岡文化芸術大学 文化政策学部
国際文化学科教授 (研究代表者)

この報告書は、2008年度の静岡文化芸術大学学長特別研究「ブラジルの中の日本、日本の中のブラジルー写真で見る100年、過去から未来へー」(研究代表者:池上重弘)の研究成果の一部として作成された。写真展そのものについては別途報告する予定だが、ここではこの座談会がどのような経緯で企画され実現に至ったかを記したい。日伯移民100年の年に、日本最多のブラジル人が暮らす浜松で新しい世代の声を捉えた記録の背景を理解する上で大きな意味を持つと考えられるからである。

静岡文化芸術大学で日伯交流記念事業として写真展を開催しようという企画の発端は、2007年にJICA浜松デスクに着任した大石真理子さんとの会話だった。日伯交流100年の記念としてJICAが移民の歴史をたどる写真パネルセットを作成し展示に貸与するという話(その時点では詳細は未定だった)をうかがったのだが、正直に記すと、その時はまだ本学での開催を想定していなかった。しかしその後、浜松市内はもちろんのこと、全国各地でパネル展が開催されると聞き、JICAのパネルセットを活用しながらも、浜松にある本学ならではの企画ができないかと考えた。本学のイシカワ准教授と相談するなかで、ブラジルへ渡った移民の歴史を単にたどるだけでなく、日本人が案外知らない現在のブラジルの日系人社会の様子や、現在浜松で暮らすブラジル人の様子も知ってもらおう機会にしようという構想が固まった。

本学の特別研究として写真展を開催する上で留意した点がふたつある。ひとつは展示の質を高めるために専門の教員を含めたチームを構成すること、もうひとつは学生実行委員会を組織して学生たちの主体的企画を中心としたプロジェクトを実現することである。

第一の点については4名の研究チームを構成することができた。国際文化学科のイシカワ エウニセアケミ准教授は、移民研究の観点から展示企画を監修し、ブラジル人コミュニティとの調整役を担当した。美術館での勤務経験を持つ芸術文化学科の立入正之講師は、アートマネジメントの観点から展示企画を監修した。さらに映像デザインの専門家であるメディア造形学科の古田祐司教授が研究チームに加わった。古田教授の指導の下、4時間にわたる座談会の全貌が古田ゼミの学生たちによってVTRに記録された。写真展の会場で上映された25分間の「座談会」DVDは、そのハイライト部分である。

第二の点については、80名規模の学生実行委員会が活動した。2007年11月に学生準備委員会が結成され、12月には予備的な企画案が学生たちから提出された。2008年4月には川勝平太学長も参加して第1回の学生実行委員会が行われたが、そこに浜松で育ったブラジル人の学生3人も同席した。国際文化学科3年の林ケンジ・クラウジオ、生産造形学科1年の金城ジゼレ、そしてメディア造形学科1年のタテベ サユリである。林には2007年の準備委員会立ち上げ前に個別に声をかけたところ、参加を快諾してくれた。「あなたが2008年の浜松で大学生をしているという事実は、自分で考えているよりはるかに大きな歴史的意味を持っているんだよ」という大げさな口説き文句は今振り返ると恥ずかしいが、3人のブラジル人学生が自分たちで座談会の企画を練り上げ、実施に向けて学内外に働きかけ、8人の高校生の参加を得て実現したことは本当に「大きな歴史的意味」を有すると言える。

学生実行委員会は広報、展示、説明パネル、コラボ、イベントの5部門に分かれて活動を進めた。子どもたちとの交流を図るコラボ部門において、座談会は3つの中核的企画のうちのひとつとして位置づけられた。座談会担当の3人のブラジル人学生が作成した企画書には、この座談会をどのような場にしたいたかが記されている。

- ① 日本で育っているものの、今後の進路に悩むブラジル人学生を対象に、将来の夢や進路について考えるきっかけとなる場。
- ② 自分と似たような境遇に立つ、近い年齢のブラジル人学生らと積極的に意見を交わし、またブラジル人の現役大学生と直接話をするにより、より現実的・多面的に自らの将来を考えていく場。
- ③ 進路の話だけではなく、日本社会に求めることや家庭での問題、親との意見の相違点など、意見や悩みを共有しあい、より良い未来を考えるための飛躍の場。

その上で、「ブラジル人学生が猝にとらわれない独自の未来を、自らの手で切り開いていくことを最大の目的とする」と明記している。ブラジル人の子どもたちの大学進学の実例がまださほど多くない現状において、浜松で育ち地元で大学に進学した「先輩」の姿は、大学進学をリアルにイメージする上での貴重なロールモデルとなる。企画した本学のブラジル人学生たち自身、そのことを明確に意識しており、後輩にあたる高校生たちとの座談会実現に向けて並々ならぬエネルギーを注いだ。

ブラジル人高校生が在籍する公立高校へのアプローチも、かれらブラジル人大学生の仕事だった。ブラジル人生徒が在籍する県立高校の情報を入手するに際しては、私が静岡県教育委員会に協力を依頼した。また、浜松市教育委員会への事前協力依頼とインターナショナルクラスを擁する市立高校訪問には林と私が出向いた。しかし、県立高校への資料送付とアポ取り、訪問はブラジル人大学生たちだけで行った。このような学生たちの行動力は、高校側にも強い印象を与えた。また、メディアも関心を寄せてくれた。静岡新聞は座談会の事前準備段階でも記事を掲載してくれたし、NHK 静岡放送局はほぼ半年にわたる丁寧な長期取材に基づきニュース番組の中で11分間を割いて紹介してくれた。

準備を進めるなかでブラジル人大学生たちに「入れ知恵」したいことは多々あったが、それは一切控えた。当日の運営についてもかれらの企画を最大限に尊重した。この街で育ち、日本社会で生きるブラジル人の若者としてさまざまなことを経験してきたかれらのリアリティを歪めたくなかったからである。私は所用があったため座談会に立ち会わなかったが、事後、林からの報告を受け、座談会が成功裏に終了したことを聞いた。そして編集されたDVDを観て、私の予想をはるかに超えた深い話が展開した座談会だったことを知った。来場者アンケートにも次のような自由記述が残されている。

学生による座談会が非常に興味深く、有意義な企画だった。特に、子弟の教育、進路を巡る親子の意識の違いは、いままで全く知らなかった。若い日系ブラジル人たちの将来への思いや現在、不安をもっと聞いてみたい。その第一歩として今回の展示は素晴らしい！（30代男性、社会人）

たしかにこの座談会に参加した11人は、日本で暮らすブラジル人の若者のうちごくわずかな成功者である。中学すら卒業できずに教育の場からドロップアウトしてしまう子どもが数多くいる事実から目を背けるべきではない。しかし、暗いトンネルであっても先に光が見えれば足を進めてこうという前向きな気持ちが生まれてくる。まだ絶対数は少ないが、静岡県内でも全日制の公立高校に進学するブラジル人が確実に増えている。座談会で記録された若者たちの声は、ブラジルと日本のはざまに生きる新しい世代の生の声であり、多くのブラジル人の子どもたちにとって、トンネルの先の光のように希望の明かりとなるはずである。